がんば

島三小育友会報
―発　行―
教養部会報班
―印　刷―
つるかわ印刷所

六年三組　松本あけみ

かえりみて

松本　殿

今日も大漁を祈って夫を送り出した妻は、船が帰る潮時ともなれば　船溜りに夫を待つ。

銀鱗をばたつかせて　魚籠に手網ですくいあげる時の気持ちは大きく大漁の期待で胸がふくらむ。昨日も、今日も、明日も、それが湊の日々なのである。大漁を祈る心。それは漁師のすべての妻の心であり、無心のかのような子どももまた、大漁の日の路地裏での縄とび遊びに興ずる足の跳ね足は軽く高い。

それは　第三小学校の教育の実績についてもいえる。教育の大漁を祈り船溜りに待つものは育友会のみなさまである。三月の帰り潮が来てこぎ寄せた岸辺に　果して　期待にそう程の銀鱗がはねとんだであろうか。しかし

とにかく　潮を追い　あじろを探り指先の釣糸に神経のすべてを集めて釣ったのではあったが。釣れたか、釣れなかったかは、やっぱり「はかり」にかけてみることとである。育友会のみなさまの「心のはかりに」。

でも　漁翁はいう。「鯛や、ひらめや、ちぬを釣りあげた。」と。

- 第三小学校の子どもの体位は市内で決しておとってはいない。
- 市内小学校体育大会でも優秀な成績である。
- 憂慮すべき非行はおこっていない。
- 交通事故もおこらなかった。
- 読書感想文、感想画等九州の最優秀も出ている。
- 音楽においても高いレベルにある。
- 全教科の学力も決して負けない。特に国語の学習においては自信をもっている。

西山にあかねして　九十九島の島山に残照が薄れていく頃　一本の晩酌の酔が　ほのとまわって　人さし指の釣糸ずれのした指先に目がとまった時　公園の体育館の沖の瀬で大きな鯛を釣りあげた快感が　また心の船板でぴんと一はねはねて「おれは釣っては負けないんだ。」と妻子に語りたい。それはたわごとではなく　あすも、あさつても　体の続く限り　海に生きたい漁師の心意気と反省のつぶやきである。学校もまた　教育の大漁を明日に祈る。

六年間の想い出

原賀　登志子

今まで、五年間、卒業生を送ってきたけれど、こんどは送られる番だ。
一年生の時　母の手ににぎられて　入学式に行った時のことがいまでも目にうかぶ。
運動会・遠足・球技大会　たのしかった時もあった。いやなこともあった六年間。
かけっことをしたり　ドッチボールをしたたのしさがわすれられない。
理科の実験をしたり、家庭で料理をつくったりした　たのしさがわすれられない。
いろいろなことがあった　この六年間
そつと胸にしまっておこう。
〃たのしい　出発のために〃

高橋　恵子

私たちは歩き
続けた。
六年間の長い
道を
楽しい時も、
苦しい時も
いっしょに感
じながら　歩
き続けた
未来の道へ
楽しい時も、
苦しい時も、
いっしょに感
じながら歩き
続ける。
卒業の時も
小学校とわかれる悲しさ
中学校へ進む　うれしさを
いっしょに感じながら歩き続ける。

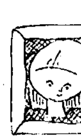
吉岡　由紀子

私は六年間の長い階段を登った。
力強く　力強く
きびしさにたえ　今　また　新しい道
へ進もうとしている
長かった階段を一歩　一歩登った。
力強く登った。
くいなく登った。
「さあ　まだまだ道は長いぞ」
ここでくじけるな。
ここでへこたれるな。
つぎの道も　もっと楽しい　もっとす
ばらしいものに　しようではないか。
私はつぎの道へ進んで行く。
大地をふみしめながら……

山本　治子

卒業　三小ともおわかれ
ちとくして　みんなが　わたしをみつ
めていた　あの時
音楽会に出て　たくさんの人の　はく
しゅを　きいた時
し料室で遊んでいて　校長先生に注意
された時
みんな　みんな　過去のこと
みんな　みんな　思い出のこと
楽しい　うれしい　思い出
苦しい　はずかしい　思いで
わたしたちは　卒業する
楽しい　苦しい　はずかしい　思い出
をのこして

夢　デザイナー
美容師　？
そんなんじゃない！
わたしの夢は　医者になること
町わら　とおい　山のおくの
水のきれいな　所で
医者をやりたい。
えらい人　りっぱな人でもない
ふつうの医者
農家のしごとをさせられてもいい
山のおくの　医者になりたい
別にきっかけなんてない
ただ　医者になって　山のおくに　い
ってみたいと考えただけ
これが夢じゃなくて実現すれば
いいなあ　と思う



時合　洋子

わたしたちは　あと何週間で　小学校
を卒業し　中学校へ進もうとしている
「長いようで　短かゝった六年間」こ
のことばは　前の六年生が　そのまた
前の六年生が　何度も　何度もくり返
している。けんかをした友だちと　仲
良しの友だちと
六年間をふり返れば　さまざまな思
い出がうかんでくる。
悲しかったことのうらには
たのしかった　ことが
その思い出を　大切にし
希望をもって　中学校へ行こう
三小のどこかに
自分の名前を
ほって　おこうかな。

「卒業間近い子を持つ親の立場」について

石橋　源七

子供は次代を背負う宝であり　子供達の教育は只知識の培養を指して言うのでなく　それは概ね良き魂　良き人格の形成を指して言うのであることも皆様周知の通りであります。

子供達は此の六年間を　風にも折れず雨にも負けず実によく勉強してきました。そしてこんなにも　立派に成長しその頭脳には多くの知識が得られ、精神は鍛練されて、忍耐強い、正義を愛する立派な一個の人間になろうとしております。更に中学、高校、大学と子供達は夢と希望に燃えて前進しつつあるのであります。子供達にとっては今からが最も大事な過程に入るので吾々親としては必然的に今迄以上の子供達に関する観察と関心を要求されるのであります。

今後は子供達もそろそろ社会の一員として自己認識をし始めますので、今までのような先生任せの安易な親の在方は許されないのであります。或る時は童心に返って子供の立場に立ち或る時は子供の友達となり　そして親の立場に戻り、あらゆる角度から子供を観察し、子供と融合しながら子供と一諸に色々の事を学ぶ努力を払わなければ決して子供の全てを知る事は出来ないと信ずるものであります。吾々親として子供の全てを知る事これが一番大事な事であり、急務であり同時に最も困難な事であります。戦国時代の武将も「勝つ為には敵を知れ」と言ったように子供の持つ能力と個性を把握しなければなりません。

而して始めて親としての正しい指導と育成が果せるのだと思います。

吾々親として子供達をこれまで育成して下された先生方の長年の労苦に対して深く感謝すると同時にその御恩返しとして只一つ残された道は、これから先の子供達の進む道を子供達と一諸に正しく歩んでやることだと思いますその為には決して急ぎ過ぎたり、休み過ぎたりせず常に最善の努力と情愛を傾注しなければ一寸としたゆだんから取返しのつかない結果を招来する事は数多い前例が示す通りであります。吾々は更に覚悟を新たにして間近に迫る卒業式を迎えなければならないと思います。

以上御指名により　つまらない意見を述べさせて戴きました。

卒業生を送る

親の立場

本多繁登

三月を間近に控えた今日此の頃、例年よりの寒さのきびしかった冬、梅の花も固く初市も目の前と云うのに、高校の卒業を皮切りに小学校の卒業もやってくる。末っ子の長男がいよいよ卒業する。上の子が入学した時から一二年第三小学校の春夏秋冬思えば永いようで短かいものだった。それは、後に続く子がいないためでもあろうか、考える都度何だか淋しい感じである。町内PTAの世話、会員との交わり一二年間の内にずい分転校なさった諸先生方の顔、私の子供達が教わった大半の先生達も今は三小に見えない。でも子供達は年毎に大きく成長してゆく。朝からあいさつをして通る中学生、高校生、途で会う青年達、彼等も何年か前は町内少年団の一員であったが、末っ子の我が子が卒業を前にして、ふと自分もそれだけ年をとったのかなあーとしみじみとした感に打たれる。手のつけられなかった子供が真面目に働く好青年になって居たり、盆、正月に帰郷する若者達が、たくましい姿を見せたり、みなそれぞれに三小を巣立った子供達だ。私達の子供がもうすぐ卒業する。新しく入る中学が待って居る。

初子の入学にはずい分気を使い、気合も入っていたが何人かの子供を学校に送るうち、いつの間にか下の子にろくろくかまって居られなくなるのが通常親達の心理ではなかろうか？それはPTAの集りにしても、うかがいしる事が出来る。初めて子供を入学させる親は一年間と云うものはほとんど町内PTA、学校の集まりに顔を出して居られる。二年たち、三年たつ中下の子供が入学する。上級学年に進む。いつの間にか親達の出席率が低下してゆく。果してこれで良いのか？発育盛り、反抗期と大事な時を忘れ勝にしてはいないのか、親の願いは正しく子供達が成長してゆく事にある。

来年或いは次々に三小を巣立って行く子供達のため、会員の皆さんもう一度初めて我が子を小学校へ入学させた頃の気持になりましょう。教育に対する愛情を二男、三男、二女、三女にも等しく注ぎましょう。家庭で分けへだてをしないのが平等の愛ではなく教育の集まり等極力顔を出し合って、お互い手をつなぎ合いましょう。卒業をする子供の親として文章の依頼を受けましたが、特に目立ったことも書けずに終わりますが、後に続く子供が毎朝私の家に集団登校で集って来ます。可愛い一年生がもうすぐ二年になる。子供達に愛着を感じ、我が子は卒業するが集団登校の子供達は今年もずっと私の家に集まるでしょう。〝背伸びする子供達〟春はもうそこまで来て居ます。

本年度の反省

育友会会長　本田巻男

不肖私が、四年の長い間育友会長をつとめさせていただきました。会員のみなさまのご協力、山本、加藤、両副会長さんや役員の方々のご支援をうけて、どうにかやって来たことを感謝しております。

さて、本年度をふりかえってみますと、プール建設のことに追われた感じで、本来の活動部面でご期待どおりに行かなかったような気もいたしますが、まあ無難な年だったといえます。育友会として、いちばん嬉しかったのは、昨年に引き続いて、本年もまた十一月に国語の研究発表会が開催され、県下、九州全域から約、五百名の先生方が参会されました。五百名という参会者は県下最高級の研究発表会だと聞いております。

子ども達は実に学習に積極的で活発な発表ぶりには全部の先生方が感心しておられました。県教育委員会からも賛辞がおくられましたし、国語ばかりでなく、すべての教科に大きな向上を見ているということで、こんなうれしいことはありません。しかしこの研究が一時的なものでなく、これから先も続けられるようお願いしたいものです。目に見えた事業としては十数年来の宿望であった保健室への渡廊下の架設、本館螢光灯完全設置、十年ぶりの南校舎の屋根の塗装も一つの収穫でした。

何といっても私の生涯の感激は児地の拡張と水泳プール建設の問題です。いずれ完工の暁にはあらためてお礼申し上げる機会もあろうかと思いますが、土地の問題でお世話になりました本田庄次郎氏、松尾金太郎氏、本田虎男氏、田中ツヤノ氏に対し誌上をもって敬意をお礼申し上げます。一年をふりかえってみますと、みなさまのおかげで三小の歴史の上で、みのり豊かな年であったといえると思います。

町内育友会

島田数男

一日の太陽の時間もずい分永くなり春の訪れも間近と云う頃、例年になく寒さが続き数十年来と云う雪の降りように喜ぶ子供達、首をすくめる親達、でも月日はすでにかまいなく卒業の子供達に迫って居ます。今度がんば第九号の発刊にあたり是非と云う事で、書きなれないペンをとらして頂きました。

当満新地町内育友会の年間行事と致しましては他町内に比べとりわけ特筆すべきこともありませんが、町内育友会員の方達の熱心な協力により大体四項目位の主行事について発表させて頂きます。一つは最近交通災害が非常に多く全国的にその安全性がさけばれております。

当町内は昨年より自動ふみ切り設置等の話もあり、すでに現在設置されておりますが、ふみ切りでの確認或は広場での信号に依る交通安全教育、永続的な集団登校の指導、特に海岸に対する注意、危険個所の歩行禁止、道路上での遊びをさせない事等重点的に指導致して居ります。合せて遊び場である町内遊園地のせいそうを毎週土曜日の朝六時三〇分から子供と一諸に父兄数年間続けてやるかたわら卒業生に依る記念樹等やり、植物を愛する心の養成等に務めて居ります。二つは社会教育の面で毎年市内会社、工場等の見学夏期又は秋期に長崎水族館等の見学等目にふれる教育の面で指導計画を立て実施しております。

三つは体位向上の面で四月は町内育友会主催に依る運動会を十数年続けて実施し、親子揃って仲良く走り父兄の交わりを深めて居ります。

尚、冬期を除いて男子はソフトボールを主体に、女子は室内リクレーション等、或は町内紅白試合等で体位の向上に務め、スポーツを楽しみ乍ら子供達の交りも仲良くするより指導して居ります。

四つは不良化防止のため夜間の行動は夏期八時迄、冬は六時以降は注意して居り、最近町内に居住して来られた家の子供達に早くなじませるよう努力しており、その成果は大体挙ってると思います。

尚、中学生に対し小学生達に悪い遊び等をさせないよう特に留意し、お盆で最近一部懸念された学生も真面目に勤労し、町内育友会員の熱心な指導協力のたまものと深く感謝致して居ります。

特に参考になることでもありませんが町内全般の関心が高く町内会等の援助等恵まれた点もあり、これから先もつと明るい町内作りは子供達を人間として正しく導くものと信じ、後から出て来る人達にバトンタッチの出来ますよう、がんばります。

春の訪れを待ち乍らったない文を終ります。

「PTA六年生」

山本篤五郎

新しいランドセルを重そうに背負い、いかにも嬉しそうに学校へ通いはじめた長女がもう今年で卒業ということになり、全く驚いてしまいました。月日の経つのが夢のようだということを見て、本校にも作りたいという熱が起きたことがありました。

翌年（昭和三十八年）に校長先生が管藤先生から松本先生に代られました。そして創立九十周年を記念して会員のうとしています。何にもお役に立つこともありませんでしたが、いろいろと思い出があります。

最初の年（昭和三十七年）はこの〝がんば〟の前進である育友会報が発行されることになり、夜おそくまで校長室や谷さんのお宅で編集したことを思い出します。又この年の研修旅行で佐賀に行き、各校に立派なプールのあるのに驚き、本校にも作りたいという熱が起きたことがありました。

翌年（昭和三十八年）に校長先生が管藤先生から松本先生に代られました。そして創立九十周年を記念して会員の皆さんや卒業生有志の寄附により、玄関横に「天皇行幸記念碑」が作られました。

昭和三十九年には、会長さんが藤田さんから、現在の本田会長に代られました。プール問題は時期尚早のため見送りになり、会員の皆さんの奉仕や関係の方々のご好意により、兎島海水浴場が開かれました。

昭和四十年には、それまで正式の名前がついていなかった会報に〝がんば〟という、地域にふさわしい名前がつけられ面目も一新して出されるようになりました。又、日曜参観がはじめて行われ、多くのお父さんに参観してもらい給食に舌つづみをうちました。

昭和四十一年には、再びプール建設の気色が盛り上り、今度こそ出かそうという意気にもえて具体的検討と組織作りが行われ、いよいよ実行には入りました。一方町内推進委員会を作ったり、家庭会議をすゝめたり生活指導の面にも力が入れられました。

今年昭和四十二年は、ほとんど、プールに明け、プールに暮れようとしています。しかし、その間先生方には、来年は、プールの完成によって、よりよい思い出が残ることでしょう。

われました。

私たち会員も、それに対して、及ばずながら、お手伝をいたしました。

四十一、四十二年と国語研究発表の大事業が行われ、非常な成功をおさめられました。

お知らせ

○卒業式
三月十九日（火）
十時開式
・九時三十分より理科室で入学式当日の記念フィルム撮影致しますので保護者の方は早めにお出で下さい。

○修了式
三月二十三日（土）
八時二十分開式
・修了証書の授与があります。

○入学式
四月一日（月）九時開式
・受付を八時三十分より致しますので、保護者の方は子供同伴の上早めにお出で下さい。

○始業式
四月六日（土）八時二十分開式
・新一年生もお友達と一諸に登校させて下さい。

編集後記

編集長　阿部哲也

・昭和四二年度、最終号をお届け致します。

今回は、卒業ということを中心に考え編集し、親心と子どもの心境を対照的に取扱ってみました。

昭和四二年度に、三編をお手もとにさし上げましたが、不なれな者ばかりだったため、皆様にびったりこない編集が多く、充分御満足いただけなかった事と思い、おわび申し上げますと共に、今後の「がんば」発展のために、皆様の御指導を得ますらば幸いに思います。

・この一年間を通じて、教養部長の御尽力と、会報班員各位の御努力、係の先生方の御協力に、心から感謝致します。